ペルー日系婦人会創立60周年記念式典株丹大使挨拶

【平成27年8月22日（土），於：ウエスティン・ホテル】

御列席の皆様

本日，ペルー日系婦人会が創立60周年を迎え，盛大な記念式典が開催されますことを，心からお喜びを申し上げます。

婦人会の誕生に至るまでの間，ペルーの日系人社会は多くの苦労を経験しています。　とりわけ，第二次世界大戦の前後においては，排日暴動，ペルー政府による財産没収，アメリカ合衆国強制収容所への移送など，辛酸をなめて過ごした日々がありました。　また，日本とペルーが国交を断絶していた10年間は，日本政府は自国民の保護を十分に果たすことができず，ペルーに残る決意をされた皆様に対して十分な支援を行うことができない状況にありました。　大変残念なことです。　日本国の大使として申し訳ない気持ちで一杯です。

しかし，第二次世界大戦後，10年たって創設された婦人会の会則には，日系コミュニティへの支援等とともに，日本とペルーの交流を深め両国間の親善に寄与することがうたわれています。　ここにあらためて婦人会の高い志に敬意を表し，また感謝申し上げます。

婦人会の活動は日系コミュニティに潤いを与え，その絆を深めてくれましたが，一方で，ペルー社会は必ずしも良いことばかりではありませんでした。　1980年代，90年代には，インフレが昂進し，テロが横行しました。　しかし，時代は変わりました。　現在，ペルー経済は成長し，社会は安定しています。

ペルーの全人口の中では，ごくわずかな割合でしかなく，しかもいわばゼロから出発した日系社会が，今日の栄光ある存在となることがなぜ可能であったのか。

多くの方がおっしゃるように，一世の時も，二世や三世も，そしてその後も，子弟の教育に大変力を入れてきたこと。　自分を犠牲にしてでも，次の世代により高い水準の教育を与えようとした強い気持ちが大きな理由であると私も考えます。

子供に対する教育の始まりは，親が子に無償の愛情を惜しみなく与える家庭にあります。　婦人会は，日系社会全体を包む家庭の役割を果たすものであり，その精神的な礎であると考えます。

個人的なことを申し上げて恐縮ですが，私は1956年に生まれました。　早生まれでしたので，同級生の多くは日系婦人会と同じ1955年生まれです。　日本とペルーとで，活動場所は異なりますが，ほぼ同じ長さの時間を歩んできています。　60年と一言で申しましても，やはり長い年月だと思います。　そしてこの間，日系社会がペルーの発展のために重要な役割を果たす中で，婦人会は常にその中心に位置してきています。

60年たつと人間は結構年を取ります。　しかし，組織の場合は，上手に運営されていれば，多くの関係者の経験と知識を集め，時代の変化にも適合して，少しずつですが，変わっていくことも可能です。　長い歴史を持つ婦人会が，いつまでも新鮮な感覚を持って，今後の日系社会を引っ張っていく存在であり続けて欲しいと心から望んでおります。

ありがとうございました。